

主要紅茶品種の組合せによる摘採期間について

穂村 豊・吉田三郎
(茶業試験場枕崎支場)

HOMURA, Y. and YOSHIDA, S.

On the Extension of Optimum Plucking Period by the
Combination of Some Main Varieties for Black Tea

従来、茶の摘採に関する文献はかなり多く、出開度
 $\left(\frac{\text{出開芽数}}{\text{全摘芽数}} \times 100\right)$ が摘採期判定の大きな目安とされて
いる。しかしながら、紅茶品種の出開度と収量構成お
よび紅茶品質との関係の報告はほとんどないが、出開
度30%が摘採の開始期と思われる。

摘採期間の推定に当つて、品種、年次、場所等によ
つて左右されることはいうまでもないが、今回は本年
度試験結果について報告し遂次主題の充実化に努めた

い。

試験方法および材料

べにたちわせ（早）、はつもみじ（中）、べにかおり
（晩）の13年生茶園で、7.2m² 3回反覆とし、摘採方
法は出開度30、45、60%の全芽摘みとした。管理は標
準耕種法。

試験結果の概要および考察

摘採時期の目安とする出開度と収量、品質との解析

を行なつた。

1. 昭36~40年の摘採日、摘採日数の推移についてみると、次の三型に分れる。

1) 平年型 36. 39年

2) 異常型 37. 38年：一番茶の晩霜害が二・三番茶期までも影響し、早生種の特徴が失なわれ、早・中・晩品種導入の意義と摘採期間の幅が甚だしく減少する。

3) 中間型 40年：図1の通り、各品種ともに出開が進むにつれ収量は増加し、品質が低下する傾向にあるが、その低下については出開度30%と45%との差が現われない。

2. この45%出開度を摘採期とした場合の摘採日数は、一番茶11、二番茶17、三番茶14、四番茶16で年間約60日間となる。

3. 出開度30%を摘採期とした昭36~40年までの5年平均の各茶期の摘採日数は、8、11、9.2、10.4で年間約40日間である。

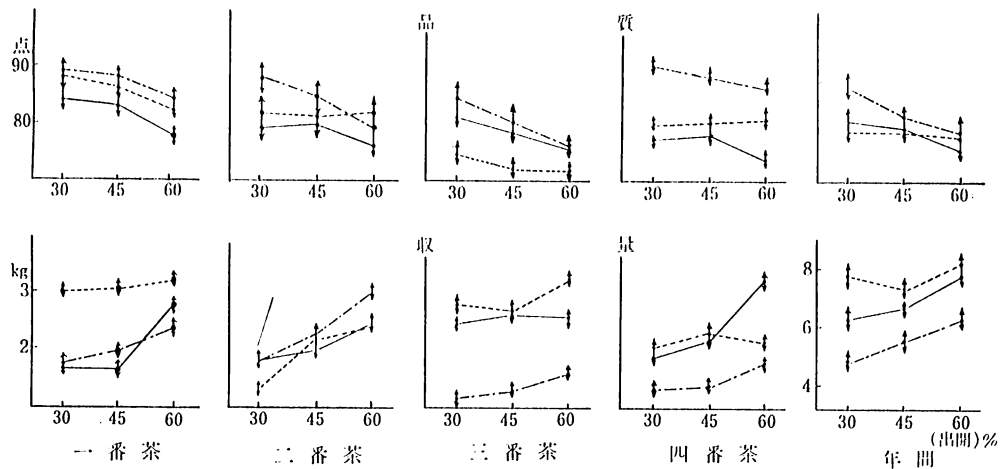
摘 要

摘採労働配分の合理化のため、品種の組合せによる摘採期間の延長を計るのがねらいで試験を行なつた。

1. 出開度45%までは品質は低下しない。

2. 従来の出開度30%摘採に比し、45%摘採は年間20日間の期間の延長となる。

図 1 品種・出開を異にした場合の品質と収量との関係



注
 (——べにたちわせ……はつもみじー---べにかおり)
 (信頼限界幅は、0.05水準)